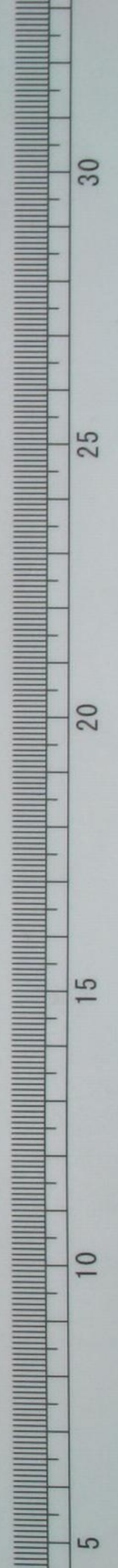




養病漫筆

三

特別
14
1919
504



176789

美ら病漫筆三

昭和十五年六月以降

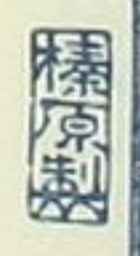
○幾年し手を通るにこの奥に二階の押入の中を捜かりしに
 菱湖の書に以太上感應経の跋本を而刻四枚を著見しこれに
 前冊に録したる如く和歌家の友故に於て出れんん書前巻
 一杯に入らざるに大身介の覆帳をすす外奥にこの書が此内なる
 間におのひ歌三四枚と尋意書とあるの書と作一ある墨蹟と
 八十丈古来の二巻のあり福祿の二字を書いたる書が此に
 んの因におのひの書にありしと思ふ跡にありし書にありし書
 が慶長四年二月手書と見え復古朝政と題してありし瑞船
 ありの字に此は遊御勅使先節の書無界の美ら病伏見之流



等視とて替へて移り搦取、その名を秋州と改め、其
十六年、及び、自通、最も、樂り、土地、乾燥、にも、山、産、の、時
又、秋冬、の、候、日、中、士、を、望、み、し、庭、上、に、櫻、林、あり、侍
出、あり、業、菊、あり、果、樹、某、園、あり、ま、ま、と、冷、み、あり、時、會
の、考、り、四、時、終、や、り、こと、り、今、北、稿、を、校、正、す、と、當
り、追、感、最、也、切、り、う、之、大、に、記、し、公、の、曠、境、を、傳
へ、む、と、す

斯くいふと、其、古、史、の、後、人、北、在、と、移、つ、と、他、原、を、後、
後、人、の、身、位、を、輪、ら、得、た、り、北、在、と、在、り、可、も、是、は、南、都、と
往、來、し、旅、元、を、逐、け、た、り、後、果、も、ある、自、分、と、し、も、彼、人、の、
も、北、別、り、た、り、大、切、の、関、係、が、ある、

○編、纂、者、は、新、京、之、冬、死、し、北、人、の、仙、後、岩、船、村、上、の、人、也、官、公



の、古、の、教、育、を、受、け、北、人、の、ま、が、内、外、湖、南、の、支、那、に、い、ろ、く、や、つ、と、り、以
から、提、起、し、と、湖、南、の、門、の、修、業、し、北、の、後、は、博士、を、得、り、も、と、う、り、た、彼、れ
ハ、支、那、の、事、の、主、と、し、支、那、の、史、を、研、究、し、以、後、人、の、往、年、二、冊、の、法、科
史、を、書、い、た、時、日、平、大、の、出、版、部、に、自、分、が、出、版、し、た、再、来、武
十、年、合、う、と、も、う、り、た、北、の、新、京、に、及、り、北、史、を、し、つ、支、那、と
ま、り、

○つ、ん、く、に、今、浮、ハ、朔、の、鹿、吟、集、を、流、入、漢、文、と、云

譯、し、る、四、五、と、あり、

山、彼

皇、甫、冉

山、彼、長、氣、ハ、關、公、朝、夕、來、宣、庭、後、何、有、

其、後、日、照、者、皆、

う、ら、や、ま、ん、く、も、ゆ、き、か、ら、ま、い、ろ、に、は、の、こ、け、の

おもてん いろいろさしき

山行 李牧

山人惜春暮、浮上初芳華、佳期何時還、
欲寄千里道

けふのけしきしへのをふきのみちちてすぢろん
おとしわかとほろいと

鶴雀梅に登り 王之漢

白日依山盡、黃河入海流、欲窮千里目、
更上一層樓

うみいしとたはなるんや〜おほかほめかぎろ



もしらぐくろふかおめ

秋日 耿澤

遙照入蘭卷、夏未誰共語、古道少人行、
秋風動未奈

いひせりきびのうもはをいふかへいふせこそ
わんわくひもろし

秋夜音丘夏外 韋庄物

憶君居秋夜、散步詠涼天、山空松子落、
幽人應未眠

あきやまのつちにこほるまんのみのおとるま

よひをきみいぬべしや

鏡照して白髪と見え 張九齡

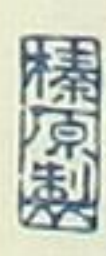
宿昔昔官志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏

形影自打憐

あまがけるこころはいつくさかみのみだゆふ

すかたわんとあひみよ

○予が散餘の書志の内大丁八廿一冊二尺五寸八分三寸
行一冊あり、是れ北河の山水畫、七十五冊と收め、
七、其間北河所産のよきもの、北河第一と定む、
其書北河自某の題あり



力権積石方達玉、是皆寒河姓見金

梅聖俞句

明治庚戌冬全題

北河漁父印

此帳本邦の有るふゆめと始り、法外四の山河深命と云ふもの
甚だ多く、以淋の具と云ふもの、昔者か曾て官命より森林
視察る海外のあり、歴淋了所の山河只等に入らざるを
世界山の天観と云ふもの、敢て不可なり、此人の畫、何人か
此を能くし、あはれ、其の時代、各圖の名漢の如く、畫して
版より、其の事、只後山あり、其の題、其の画の名は、
之殿あり、其の事、山岩下法内、其人の画を善ん、其の画、
作く、其の事、其の畫と、當て、印、其の事、其の事、

あり、邦人の外圖を撰ぶるは、概ね畫筆よく、到る處の名山大
川を痛過するもの比は是れより、北海のこころ畫筆を有し、到
る處山ありを寫し、その或れとあるは、予は北帳を性
年よりそとて、購ひ入ん、北海の草千宿かと思ひ、
り、か今又その皆印刷し、その也、心くく北海の在
り、か、いん山の畫帳より、予は之を割き、その也、
か、或れは、書畫とて、その也、いん、その也、
りて、た、頃、其、繪と、繪して、現り、即ち其の文略を記すと
也

外圖山の内外を、又、其、撰佛二回、蘇端之人は、次く、各圖
の地名を原注し、書し、皆淺條の彩色あり、

以上の山女帳と、其に散るの粉本二巻あり、前録の
アルハムと同形の日本紙巻のアルハムに、張蘭溪の粉
本が百枚餘あり、こゝにあり、この粉本の姓年は、
の千秋屋(長江長男)と、獲た、其、蘭溪が粉本と
他、其、訪の、時、梅園の、殿、侍、の、あり、て、遺、族、の、多く、の、粉本
を、傳、り、來、つ、て、寫、した、もの、が、十、中、の、八九、と、占、め、ら、れ、る、と、考、へ、ん
て、お、れ、と、考、へ、り、持、ち、來、つ、て、ある、もの、は、其、書、の、或、り、よ、る、アル
ハム、と、號、し、て、れ、其、内、の、二、巻、に、雪、烟、帳、と、雲、の、比、よ、り、北
の、粉本、の、あり、。此、粉本、中、の、二、卷、畫、の、多、い、が、其、の、者
而、も、い、ち、も、よく、云、亦、山、陽、が、梅、園、に、書、き、世、つ、れ、詩、の
模本、も、よく、て、あり、。姓、々、張、卷、の、印、清、遠、を、その、の
蘭、溪、の、花、印、も、よく、。其、の、所、書、心、の、あり、す、所、書、り、て

子母を各出帳とせし家も存すといふ

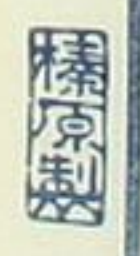
口原久一とハハキの向方のとよむ早大に美作のまんじ
後外回終る後が寂存と云ふれどもあるは早くから
トリストイの及海と心わげは湘純あるをみし出
れども也あふ道に中央公論社から全集の得を
出せしといふも四年半寂録を終り定りて其の
た。此の向を問ふも病んれといふあるが所記せり也
一に定域と書かれトリストイの著の何れも其の
品はあふも一にの洋がる作と傳ふるは書傳り
といふくぬかあふもか。是と傳一人の手ひ全集を
送けたといふ傳とよむべき也といふ也

小野東洋の書簡(大根屋宛)
与島丈人の余り寄せて書簡
坪内方田と余三人の書簡
訪書録

金剛場陀羅尼經(白鳳注)
六朝字本皇侃義疏(早大本)
國寶古文書(早大本)
六朝玉印殘闕

趣味法書

小栲庵 紅雲山房の希額



早大の明徳回并玉代の額
坪内も送還墨の内
泚和亭送還故紙の縁
高笑草堂印幅二
板口五卷一鶴魚石歌并唐書二
寺崎屋業倫の手紙
印の陳列圖
小栲庵
名家印と印影

先考の家字経

休之同家山堪言仲氏易序

秋月程村曰序

此の六冊の巻葉は白合の瓦板白紙俵に代りつゝふきよ
かたしことと思ふて入るべき力り下は白合の縁因のせ
ちのま可成納めて置るゝこととていふと考くても、又此の
ものま入るゝことにはしれぬ。

○宇治拾遺物語の巻の瓦板がある左の一説は偽疾の
例とて書物伝記に或る人が載せられたるものなる。

昔中納言師時とある人かたしつゝ或る人の世の中納言

標

の許に、短かい墨染めのころもを着て、其の上に不動袈裟を
掛け、木錬子の大きな念珠を手練りつゝ現れた一人の聖法師
があつた。

『お前は何の御僧で、また何の御用があつて此處へ御座つ
たのか?』

中納言のお尋ねに對し、いとも憐れな聲を捧つて此の僧は
答へた。

『愚僧は假りの世の夢かないのに堪へかねて居りまするが
これと云ふのも詮するところ煩惱に引かされて居ります故
と悟りましたので、此のたび煩惱を切り捨て、偏へに生
死の境ひに超越しようと心掛けました聖人で御座ります』

『何? 煩惱を切り捨てたと仰せあるのか? 煩惱を切り
捨てるとは、如何なることにて御座るかな?』

再び中納言が尋ねられると、法師は兩の手でころもの裾を
まくり上げ、其の陰部をさらけ出した。中納言は不思議に思
ひ、眼を凝らして能く之を見給ふと、有るべき筈の物が有る
べき所に無い。

原文にはそれが次のやうに書かれてゐる。

『まことにまめやかのは無くて、ひげ計りあり。こは不思
議のこと哉と見給ふほどに、下にさがりたる袋の殊の外に

覺えて、人やあると呼び給へば、侍二三人出で來れり』

『下にさがりたる袋』とは陰囊のことである。成るほど有
るべき一物は無くて、陰毛のみ繁つて居るが、殊更に陰囊が
ふくらんでゐたのである。中納言は之を怪しと見て、侍者を
呼んで之を検査せよとしたのである。

『中納言、其の法師引き張れ、と宣へば、聖は阿彌陀申し
て、とくく如何にもし給へと云ひて、哀れ氣な顔して、
足を打ち擴けておる眠りたるを、中納言、足を引きひろげ
よと宣へば、二三人寄りて引きひろげつ』

法師は念佛を申しながら眼をつぶり、如何やうにも検査さ
れよと、兩の股をひろげらるるに任じたのである。

斯うして見ても矢張り有るべき筈の一物は見られなかつ
た。

『さて小侍の十二三ばかりなるを召し出して、あの法師の
腹の上を、手をひろげて上げ下ろし擦すれ、とのたまへば
そのまゝに、ふくらかなる手して上げ下ろし擦する』

中納言は偶と思ひ付いて、美しい若衆を呼び出されたので
あらう。そして其の若衆の柔かい、ふくらかな手で、陰部を
擦すらせて、之を刺戟させ給うたのであらう。

『とはかりある程に、此の聖まのしをして、今はさせおは

せと云ひけるを、中納言よけになりけり、只さすれ、それそれとありければ、聖（の云ふ）様、悪しく候、今はさてと云ふを、あやにくぞ擦り伏せける程に」

美しい若衆の柔かい手の刺戟で、法師の色情も挑發されて來たものと見え、今まで見えなかつた一物が見え出して來た。恰好もよくないから止めて下されと、法師がたまらなくなつて云ひ出すと、中納言は之を聞かず、小姓をして擦り續けさせた。然るところ

「毛の中より、松茸の大きやかなるものゝ、ふら／＼と出で來て、腹にすは／＼と打ちつけたり」

今まで隠れて見えなかつた一物は、遂にによき／＼と現れて出たのである。

「中納言を始めに數多集ひたる者ども、もろ聲に笑ふ。聖も手をうちて臥しまるび笑ひけり。早うまめやか物を下の袋へひねり入れて、そくひにて毛を取りつけ、さり氣なくして人を謀り、物を乞はんとしたるなりけり」

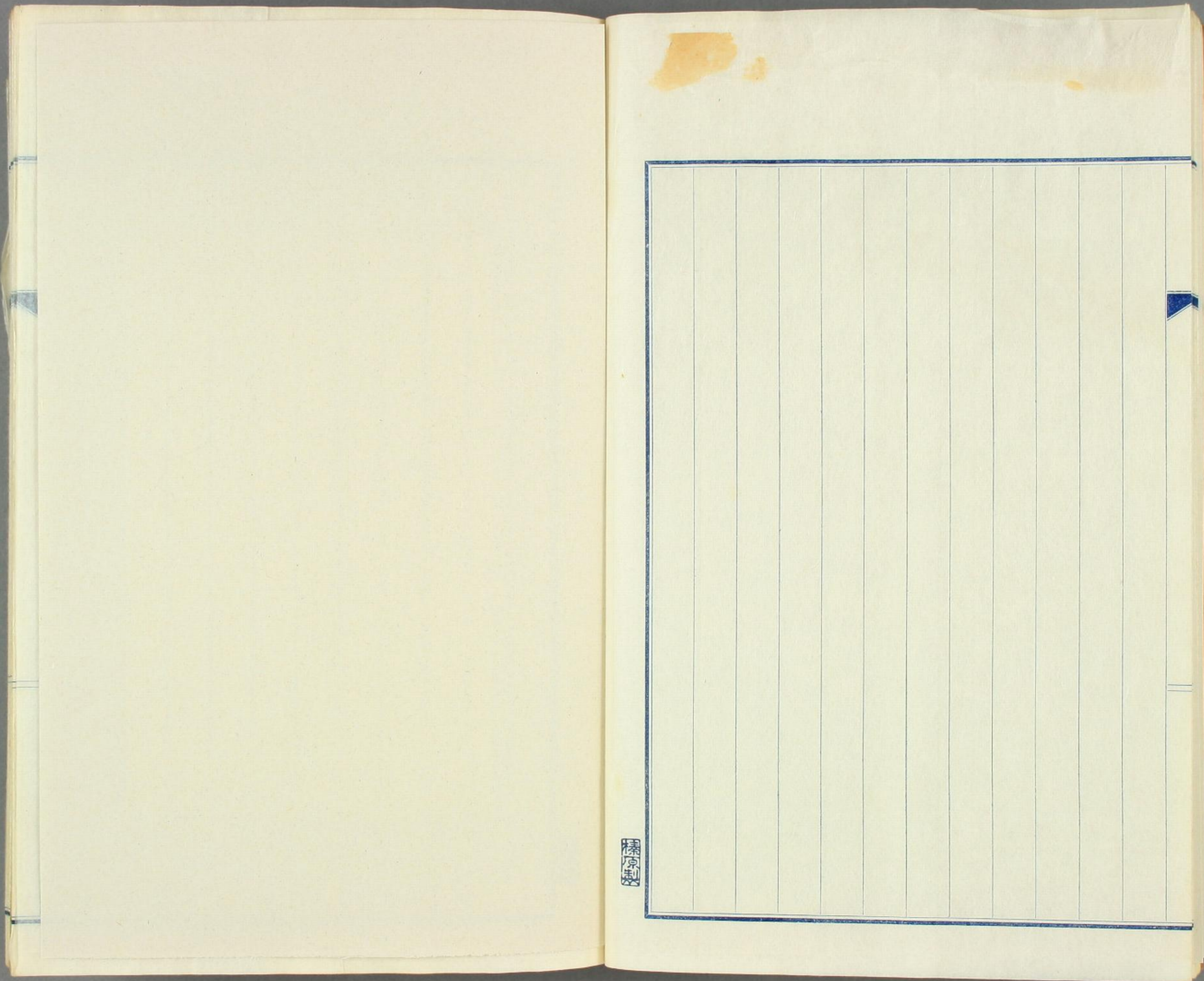
陰物を陰囊中にひねり込み、糊で陰毛を貼りつけ、さては煩惱の根を切り捨てたりと詐稱して、人の憐れみを乞うたので、如何にも法師らしい詐病であるが、之は私の分類によれば詐病中の構病と稱すべきものである。（宇治拾遺物語）

○山来野より同郷の友人の死を聴く此の二三ヶ月の
五人まを教へて、前連より竹打りおん中村近千かま
福系 若山(若山)の故郷、森の最中かま 永井一禾
かま、此等五人の内親疎の相違かま、けんも皆
人か一れいと交つれ人々か、福系 若山の村上出
て、支那にたり内若湖南のつと生とと活報史
と修めと文より博士のから得れ人か二十数年今へら、
九か遠く支那に客死した。本林の最中、新行を技
の向山かま、いふも死に、最中り、何れも、
の家を感す、永井一禾の鳥と書くも、得るを
書かか、久しく疎遠に、死にと思つて、わかれ、此の計と

漢京

得

酒中村近千博士の死を、所感と早大が、
後述さ、この死、此死の、か、
美い人か、
死を聴くも、
とい、
家、
と



湖山



六月廿六日無土殿兼中街頭台三師
振鏡

う。

日支の戦争は去古と以て満三年と云ふがヤマト物次りの
 統制が行はれし米炭酒砂糖と切符制と云ふ大倉
 俊品が禁令を布きし。其の三年後の今日ヤマト斯の統制
 を云ふの人は邦が物次り事なくぬすを志すやうな
 此外四や五の一年も保つ得るのがある。統制を云ふの邦
 人も苦情が絶えずとある。其の意は三式を思はま
 うといふ。然るに邦が統制の回を計りて政府に
 不慣の言を云ふ。支錫も多し。統制の意は關取川が盛ん
 に行われ配給の公平を得る。且から生計の繁からん。其の
 此後には第一の邦が事なき。 (七五十一の録)

此の如き一紙白分の定まり記
 事よりき居り、土地を開拓し
 即左二つの子と新築の信
 こと、右地所を明治十三年十一月
 日、同く十四年三月酒田山の
 轉り、一現在地元の所
 一七敷(一ん)ことあり、
 信ありてあること、初
 右隣の田家、奥平河
 又秋月種村の未治しに二件、
 文を載せしむ。

藤原製

御伺書

一 御先代様が天保三壬辰年時
 門様の御見立新田地と稱し
 (字打上分大) 辰田分 (一
 上げ被成候て開墾被成候様
 され一様兼り候

尚、右地所は明治十三年十一月十一日新登田本村
 溝口良轉殿 (一
 御同人より明治十四年三月十一日諏訪山新田大野
 誠殿一書却之れより轉りて現在地元の所有と
 相成申候

一 右地所灌溉用水路取入江筋新設の件、

の為取替証書をとりもつ之候之の書中ニ

水原村西組

熊倉孝吉

下条村百姓

市持市良吉

とあり之候

一 明治十一年九月明治大帝北極御巡幸の御行在所に於て天類奉拝被仰旨候もの現今の我関石村にては左記の御一人のみ御座候

石田新村

市持市良吉

一 源亮と為致候候儀又は携帶所持の方より取替之候

一 御足代孫が弟也、御出の節は石田山口平太郎方へ（當時旅籠屋を宿せとす）御三哥被成替り御滞留其後御在作法普請被成候由事候事、御座敷の一部山本某方、今以て其儀保存有之候

一 右の開墾地を今以て角一新田と稱し、一角一と申す稱号は御言家の御家号にて御座候哉

一 右の開墾地より承する者特の古書類御座候哉

一 市持皮良吉源亮と申候は御同入候事にて御足代孫の御名前ニ候哉

一 兼儿は貴下孫も替り石田村ニ御任在被成候由事、左孫、御座候事、右特の御記憶御感想も此座候事、兼り度、親上候

以上出ルルがら御同申上服候旨

形由書出申上

○米内内閣が突如総辭職を行つた。突如の辭職であつたやうに
ハ其旨もあつた。期待さるゝことだ。直接辭職の動機ハ陸相が自
分の辭職を以つて之を解決を促したのひあつた。陸相ハ政海大戦の
物趣ハ鑑みて日本の外交ハ大転回を要すると思つたのひあつた。
差當り及外事務を治めようとする。相變りす。英米の界
息下の心配をわらう。従來の外交を清算せしめ
る。今ハ格伊ハ政海と度事とする時だ。佛の

陸相

降り英も速かしく其の運命を決まんとする時だ。英ハ日本と
手出しをする。彼れが無い。彼れハ寧ろ日本が格伊と手を握
らんことを恐る。日本ハ媚心と呈してのみ。米國ハ大言と吐き
出す。英の窮迫もこの時と云ふ。支那援助を絶つ事
英ハ抑制をせんとハする。米國ハ獨の勢力ハ増心を有し
漸々東洋のモンロー主義を認めよう。此時又英の日本
の外交を清算し新格伊と手を握るの得策である。こ
とと日支市變と云ふ。大切ひあつたと考へて外交界
横を英中とみる。格伊ハ政府ハ能く加強温かあつた。先
の百の外相の汚説の題に徹底的にこりきりト二ホ的ひあつた。
陸相との間ハ紛糾を生じた。勿論此間ハ重慶の法然を佛領
印度と英のじんマルトを意断すること。英佛の同意を

得ん、此れをいへば支那は三ヶ年と経てやつと違ひはれんことか相手
 が弱つれば海は我果に外るべし陸軍はよきヤキクたつてを
 得るべし英米を捕り現内閣も陸相の主張するときは外交
 を替換するべしといふも出来ぬ。今や政治の新体制を
 要するも空言の注ぎ、近衛公之を期待する諸公の
 相殺りて其の空言を解き心と實ありて公の激起を促しつゝ
 り、陸軍も其れも公を期待をせしめて公の激起を待つてあり、
 陸相も其れも公をつきつけ短刀の文の早く公を起しえんと
 する措置に外るべし、米内閣も新政体制を急ぐべし不向を
 ろいかに急ぎ外交を交換し行へり上不可能として道を拓く為

日獨伊同盟を締結し 地域的世界體制建設 南進強行・東亞圈確立

外交轉換・輿論の指向

國際政局の激動期に際して事態の進展を期し、東亞安全保障の傳統的關係を推進するため、わが國は諸國外交の一大轉換を遂
 行してあるが、その具體的方針は日獨伊同盟の締結を最高目標として、英米依存政策の揚棄、地域的
 聯盟主義による世界新體制の建設、南方政策の積極的遂行による東亞經濟圈の確立等の諸點に要約さ
 れる、しかしてかくの如き外交政策の一大轉換はわが國在來の政治、經濟、國防等の根柢に關する問題であるだけに、堅なる外交轉換のみをも
 つてしては不可なり、その前提として國內の諸機構、體制等の根本的革新が強く要望されてゐる、いまこ
 れら外交轉換の具體的方針を解説すれば次の通りである。

日獨伊同盟の締結 歐亞新秩序建設の中心勢力たる獨逸國と東亞新秩序建設の中心勢力たる日獨伊同盟の中心勢力たる獨逸國と東亞新秩序建設の中心勢力たる日獨伊同盟の中心勢力たる獨逸國との關係の強化といふが如き常態的表現より一歩前進して三國間の最高同様な
 的結合として同盟關係を認定する、かくて獨逸不可侵條約に則つて
 日ソ間の關係も調整しソ聯を中央位置に日獨伊同盟がそれらの目的
 達成に邁進すべく、帝國としては北方國境地帯における安定状態を
 確保して南方政策の積極的推進にこれと關聯する英米關係に關
 へ、場合によつては南方問題解決のためには實力の
 發動、特に日米間の最悪事態の招來に對處す
 るの重大決意を固める、獨逸國との外交轉換は前記の線に
 沿つて、ドイツの英本土作戦の開始前にこれを
 行ふ

英米依存政策の揚棄 世界の趨勢力たる英米
 兩國に對しては從來の如き外交方針に徹底的修正を加へ、な
 んづくわが經濟體制における英米依存から脱却する、即ちわが國の
 軍業、化學工業等の原料供給面に獨逸、其、露米、羊毛工業等の

歐亞の米國及び英露等からの輸入は漸次日地方及び獨逸國をも
 つて代替せしむる、このことは必然に國內經濟體制の革新を前提と
 するは勿論である。

地域的聯盟主義の確立 中亞東歐の平和秩
 序たる獨逸國境の沿路に獨逸、歐州、米州、東亞等の諸地域内にお
 ける平和と秩序を先づ確立してこれらを擴大成して世界平和の確立
 に寄與する、このことはヴェルサイユ、ワシントン兩國際の全面的
 打倒面に諸國が生む東亞經濟圈の確立的發展である。

東亞經濟圈の確保 日獨伊三國の經濟地位を以
 てしてはアワタルキー(自治自衛體制)の實現は不十分であるから
 佛領印度支那、タイ國、蘭領東印度等を包
 含する南洋地方をも東亞經濟圈に包擁して東
 亞聯盟の經濟的基礎を鞏固ならしめる、これは
 近衛聲明に實現された東亞新秩序の擴張的基礎であり、國際の新體
 制の出現に對處する東亞諸國家の最小限度の切實なる生存權の要求
 である。

御伺書

一 豊次郎様は御舎弟様にてあらせらるれば一か実は困律の詔
さへおつれば豊次郎様云々の難も出ますので豊次郎様
は貴下使の伯叔父か又は兄上様かと存り申候御事候
ての瞭致一難有存候

一 御産家は上流川の河三の弓湯屋化糖の河附といふ中
之派なる建物に御産候今其侍岡谷村古守山本市井様
と印氏の産産と去て保存あり候

一 其当時水至より随行せしといふ事産産田産と申者其
後下関村に住居いたし日本一の専産と自稱する文お
りて村上中條方面の職人等との甚くお交り手籠りて
省之故是れは倭産靴の男りて松若切太の渡松若の父兄

と後危よて百を引きまるとして遊びをるるをりく足立
け申候同人の指ひたる書下様御宅の書も今も保存あり
りて自傍おの借仕ある之依のむの子有之候当元老人は
爾三年前八十歳才かみこ候り申候

一 勇平権輔の傳記より此は成衣没為北征年謀為任越後守
権判事云ことありは成衣の臨も定めし書下様御宅一所
三ありのてく存候若し秋岡谷地元の風景如何か我地方
不問する詩歌ふても御座候りい羨り候

一 秋月権輔も成衣の没後信濃御領御領の書も西田忠信村
原破を遺はされし由御座新傳も書下様御宅一御事起り
されしとの正候候は是も秋岡谷地元の書下様御宅の詩歌等所
産候りい羨り候上候

一 成衣の没後如舊時村田勇吉街りの病所と崩りまるといふ
下岡村伝某方た記の傍者い似署名〇〇のゆゑ字別紙
写しの通りみて不孝判後遺書以間申奉承上候
一ツ人の通もまじきたる會系を賊本るならは嫡傳者
でだご尊統それどもきあずるあるならは骨は刀の引

出物

(ニワよりハツまで看解)

九ツ心ゆるきな古事の時上下岡のその先は犬里峠に城
めらが居るとの事か聞之つ、不日の中にお打取せ
十ととがあや人を故もろく殺すは賊の所業をよ

成衣之秋八月越後下岡に於て中條村之酒具嘉久次登
まあゆ世書卒

さら摩國之部 〇〇書

一 五峰の書幅を記の通りのものである

朱裡又成告 去探関谷秋 一 渡穿菊岐
逢自羽州流 聖母即事一 五峰後

朴坂山光如流波 荒川風景似鴨河
北野誰識志住境 一 醉豈人存獨何

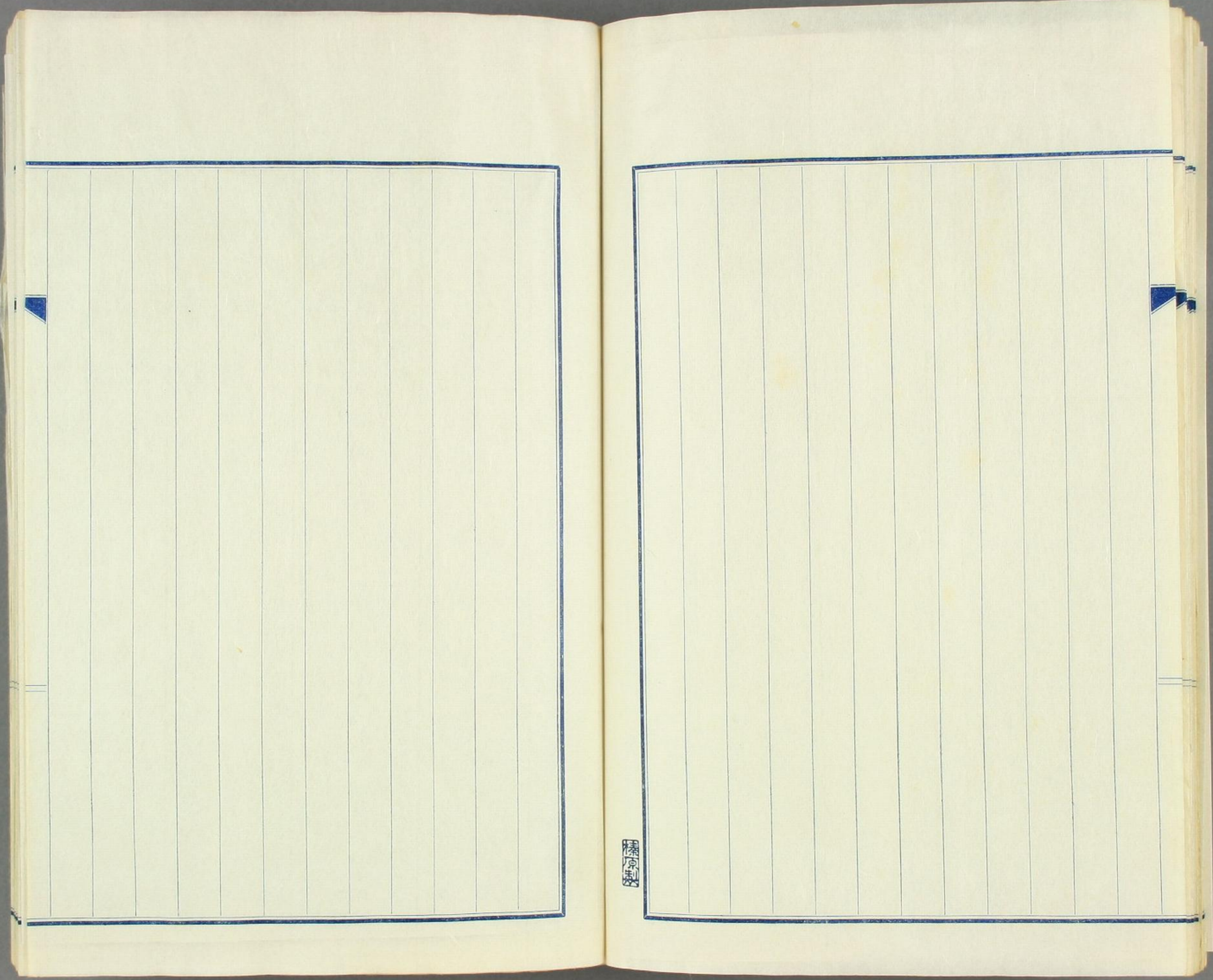
五峰 醉第

甚勝歌長酒六長 顛倒裳衣起上坊
裾新拂去銀燈燭 舞腰翻一 膝女郎
親渡遠惡弱教戲熾之贈此 五峰

以上

途中

一 大石村産産物七郎と申す者永年中下保より人夫以百万
人毎所傳り申候て用水を大石川の沿岸を里館の上より
り清水を引入れ上の平と申す所二田地即所物給を榮盛
に一 明水に申す三月高入出候いたるをより記名碑
も有し候外も同様之事これあらんかと各村に名符を
印めしといふ候ものも同様といふ一 似も大概火災に罹り
たりとか或は家運衰微したるゆゑに名符を他處へ印つ
り候と一 自然古久書も紛失し物も是等開名といふ如
き様書の手紙の書かされらるる間するに録一切忍事り不
本強急に存候



藤原

○獨り其の本より攻め入り先んず爾會を開いて派手な演説を
行つたが、も其時伊のムリリニも来たりて、四合をへんと其の演説
を聞かされた。其の録言をよむ演説の或る部を放言して吾等の耳
も觸れぬ。臨機漲り一語も鏗ると響き拍手が盛んになり
つた。朕有り演説の仕方へ無量の親び人と殺すを止めと和と
講むとの初まごころが、よりの演説のよも極ふと進んぬ。此
れ、英の上場は恰も最悪なるありき時が、輕き事とする米四ハ冬
も去らず、皆つて提督の地傳も其の般に英に地勢をんぬの如きつ
て獨伊を授けし英と對するといへば、日本七亦近衛亦二以内を
か但備さるると獨伊は左祖をこころあつた。其の考ふべきは、此
時であらざるや、獨り其の演説は和が来らざるや、其
れも其の對内策も、この如く、この如く、この如く、この如く、

ヒツトラが獨走の奇射砲装置の汽車を伊太利、賜つた
と云話を多くと同時日前掲の如き画がアセリか描かれ
たことか、此の如く、奇射砲のトルチカつき軍艦の機
を多く、空高く出果つて、高く飛行機を打つと動
かすの奇射砲を以て待つとの馬鹿げたことか、獨走の奇射
砲を汽車に載せ、其の走るままに走る地故である。

○若し、電報和あるハ天子から呼んて、まゝに、芋が煎いた
るのと、まゝに、惣然と、まゝに、まゝに、まゝに、云々、

枕石哲生、産蘇、影録、天書、促行、芋子未熟
まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、今方の内、各は、儀、まゝに、海、まゝに、まゝに、
の、候、神、か、数、人、あ、つ、た、まゝに、電、報、を、以、て、報、く、と、皆、死、存、在、
の、味、は、お、も、た、まゝに、物、有、ぬ、と、今、法、三、合、心、議、し、た、と、お、お、

すゝと面白の對相である。

○此の生活の必要の米炭其他の採掘やマツチを、まゝに、まゝに、
價を定めたり、後利、一、つ、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、
功、まゝに、分、定、相、場、を、拘、り、まゝに、價、を、拂、つ、て、買、い、海、を、まゝに、まゝに、
已、を、得、る、の、は、米、も、炭、も、各、各、の、備、を、し、て、お、お、まゝに、為、め、す、ら、く、金、
が、要、す、ま、ま、の、物、の、欠、乏、を、まゝに、まゝに、まゝに、公、定、相、場、が、相、ま、ま、を、
幸、利、し、て、お、お、の、お、お、まゝに、公、定、の、お、お、の、換、を、まゝに、まゝに、まゝに、
酒、の、お、お、の、お、お、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、
日本酒二合、お、お、の、お、お、二人、一本、と、定、め、まゝに、まゝに、まゝに、
酒、客、の、お、お、の、お、お、の、酒、を、持、来、し、て、行、く、向、き、も、あ、る、と、ま、ま、米、を、西、
洋、科、地、に、使、ハ、セ、る、の、為、め、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、
止、ま、ま、の、お、お、の、飯、を、お、お、の、お、お、の、お、お、の、お、お、の、お、お、

新くまると好むを教へて序をなすを取んとして、儀の
の家を造りて入りて居る。この儀を取つて外に、ハルハル
純粋のおかろふから、本ありある家の祀、おかしき女、女と人
家でもマツチは世つたによれば、今、奥州家の之れを推せりせぬ
ハルハル。米を代用し、餛飩を使用する。一室もあるが、自合の仕
合せん家、互つて、白米を合しとぬ。この主味を、替へし、米を
の身、そのまゝと、米價の安いのが、此の儀、一寸あることかあり。
御中の、十、ば、の田地の、おと、二十回、三、四十回以上の、
獲か、無つた、此、百二十回、おと、獲を、得た、の、女、前、大、
獲、おと、た、替、洋、品の、禁、止、令、か、出、で、吳、服、居、る、百、回、以上
の、吳、服、と、着、る、女、と、さ、う、た、の、女、吳、服、居、る、お、と、た、お、か、ま、り
に、く、ら、い、の、女、い、く、ら、い、の、價、が、下、げ、ら、る、女、お、と、た、お、と、た、一、百、回

禮記

近ごろ、吳服を買つておとす、此、令、を、犯、し、た、と、い、ふ、女、が、ハ
爾、後、の、儀、に、對、し、て、入、ら、ぬ、と、注、き、ま、す、と、云、ふ、の、う、ち、折、り、て、買、か
た、か、い、ん、ふ、儀、と、云、ふ、の、入、ら、ぬ、儀、と、云、ふ、の、を、お、と、た、お、と、た、の
儀、の、十、八、儀、の、儀、あり。

つ、先、頃、滿、洲、國、の、皇、帝、ハ、日、本、の、元、千、六、百、年、の、皇、紀、を、記、す、る、為、め
特、々、未、朝、を、い、て、滿、洲、中、に、伊、弉、諾、の、大、廟、を、造、り、皇、帝、の、滿、洲、法、廟、と
名、稱、す、一、日、も、閑、暇、の、日、を、あ、げ、ま、す、と、い、ふ、事、あり、未、朝、の、儀、
は、是、觀、じ、あ、る、か、ら、新、く、あ、つ、た、の、入、ら、ぬ、儀、ひ、ろ、く、な、す、と、勤、め、の、儀、
と、い、ふ、事、あり、を、感、動、さ、せ、し、也、**●**後、開、く、と、い、ふ、事、が、天、正、大、神、を
奉、祀、す、る、大、神、の、任、務、が、信、じ、つ、た、地、鎮、祭、を、執、行、せ、し、た、が、其、後、
魏、朝、の、儀、を、記、載、を、お、と、した、と、い、ふ、餘、り、前、例、の、無、い、こと、が、外、國、の
天子、が、吾、が、祖、宗、**●**と、祀、す、こと、に、恐、ろ、く、と、い、ふ、儀、あり、伊、弉、諾、の

大廟、外回の天子の参拝をんなの七堂前の事と云ふは、是れ
しろく目録の天照大神と祀りの神殿を經るに御日事仰せ
つゝ、あつた、あつた提提をほくちり、點又たて、こゝろ以上
といふと思ふ。

の英國危急の場合左の如き記事が、現に現れ

英、現内閣退却し

獨の勸告應諾か

新政府に交渉肩替り

【ローマ本社特電廿二日發】パレルヨリの報道によれば、ロンドン在留の中立國新聞記者會館では、ハリファツクス英外相の演説後やがてチャーチル内閣が總辭職する可能性ありと見てゐるが、この際、總辭職がヒットラー總統の和平演説の結果と見られるとを、極力避ける方法がとられるだらうとしてゐる、即ち廿三日キングスレー・ウツト駐伯は、驚くべき演説報告を提出するが、それは

英人と軍事機密との間に十四億三千二百萬ポンド（約三億九千四百四十萬圓）の天差があり、その他に赤字の補填方法について懸念を認めんとするもので、下院は右の承認を拒否すべく、政府は財政問題にかこつけて總辭職を行ひ、これに代る新政府がヒットラー總統の和平提唱を受容れることとなるだらうといふのである。

（ローマ本社）

此の報告は、事案の如何か、いふに、今までの如く、英國は、平和を望むが、
そのこと、事案の如何か、いふに、今までの如く、英國は、平和を望むが、
美の爲め、内閣を退去せしめ、と、勸告の事、平和を望むが、
事と、うら、現に、いふ、いふ、いふ、且、と、記し、後、の、徴、見
と、する。

七月廿四日

心華錄

養心錄

養病錄

徒然抄

花月帖

至言錄

湖吟錄

川柳子

聖言日抄

至月吟

瓶間錄

瑛法經

徒然抄

檀鼓海語

麴香錄

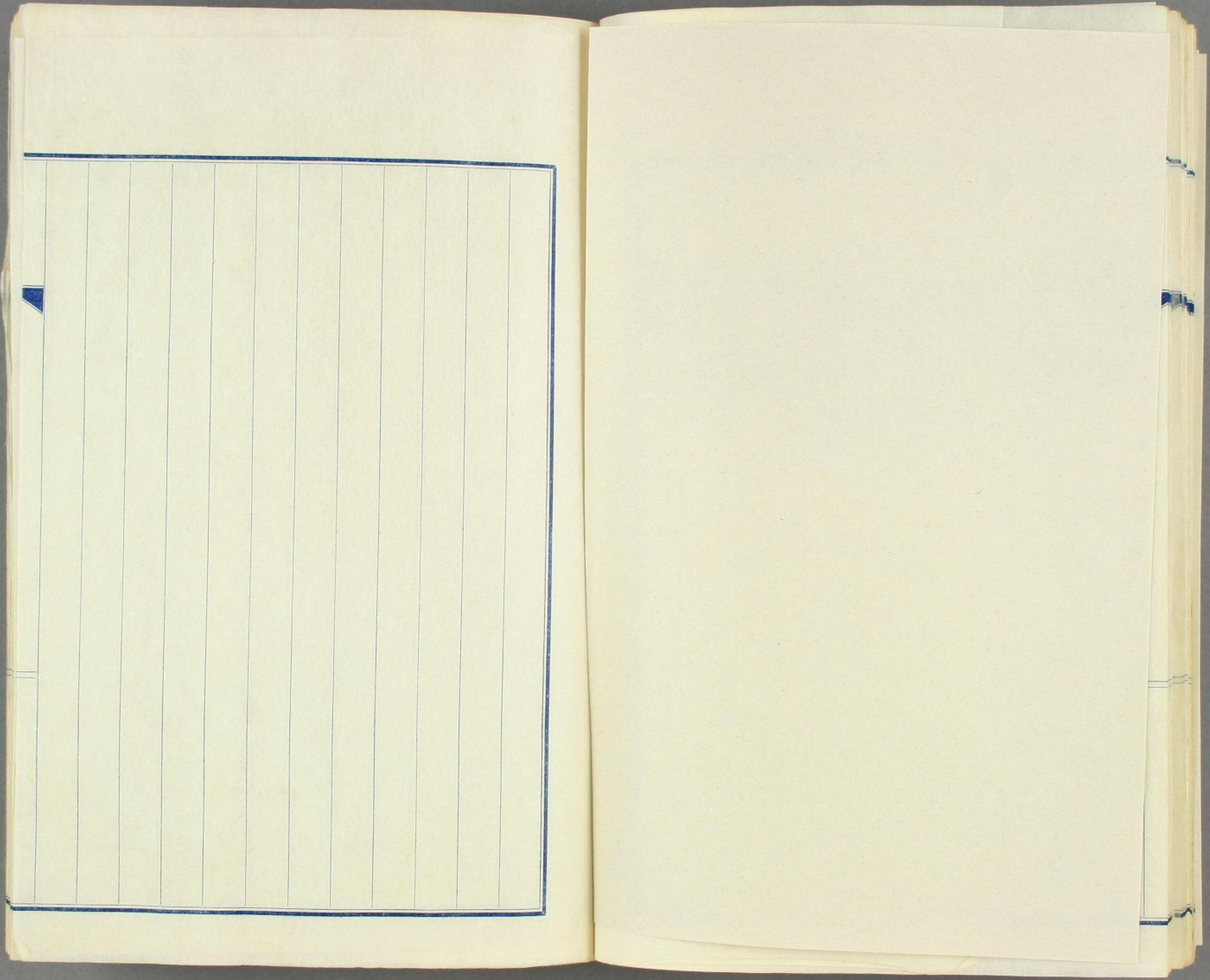
代聲錄

古詩漫抄

風吟詩鈔

新江紀略

霞海書



○市曾迷雇の事を考へたる甚だ少い人の入
間と書物色はけいじらふ心他の事ハ何れもこの事
左の一法ハ金鶴雜話といふとある。右ハぬきとあり

○昨今漸次凡利の要請英大なるに付英大は後迄分るるの標札が
堂々として出たなり、付英の二字が公然許されたるを亦公認せしむる前

英大

の事いふ、此前者田外相とカシキ、英大使と租界交渉問題の
起つた時、英軍の来ると未んといひ然るをも、後通に國人の敵愾心
が成るるより、此時、付、英の主権侵すべし、此の如く、公使
は、よび、公使漸く我外交の懸念を汗すよむある。英軍の今、英
ハ其の場合い、然る、將に日本を攻めんといふを、伊ハシブらんタ
ーと衝あんとし、英領印が、日本を企てつゝ、英ハ、甘界ハ一濟、
英の没後を維持してあり、此際、英ハ、亦東方の利害を、
顧み、然るをも、近しく、英ハ、駐屯兵を租界から、
引揚、
ること、日本ハ、對する、漏れを、
英兵の進退ハ、
して斯く、
は、
文が、
長び、
英、

十数年前英が日本の對しての教への不信、今海軍を以てし時である。
海軍は日本英を抗撃する蜂火の揚りたるが、当然の事か、我々
が英の獨英の戦況を熱心に見つ、あるの、早と英が城下の營を
とらす、と見ると、能くするからである。
(八月十日記)

○英國の天意の海軍を頼んで敵軍の上陸を許さず、今、三万五千三
十年前、エリザベス女王が西班牙の無敵艦隊を命じて、國を巡り、
とす、是れが戦の北時と、同じ運命の、後りなると。今、この敵に
上陸を許さず、英國の全、龍城の、運命を、海軍を以てし、
甘果、海軍の英國の、物資を自給をとり、入る、とある、今、運送船
ハドレ、沈没する、掩蔽の、甲艦も、先行機、兵器の、為め、魚雷を、
を、得る、船も、英海軍の、注目を、改、す、入、た、ら、其の、根拠
地、ドーヴ、海峡、と、隔、た、る、岩、岸、も、ある、能く、上陸、せ、す、と、
龍城、と

藤原製

長く候、海軍、美あり、英國も、今、糧が、欠、乏、して、く、船、改、新、室、権
を、得、る、と、さ、す、と、英、海、軍、は、船、の、煤、油、の、改、新、を、受
け、た、ら、な、る、英國、の、如、く、國、内、の、方、業、が、興、く、今、糧、を、餘、り、に、
す、所、に、於、て、は、海、軍、の、最、も、困難、な、る、國、民、に、一、く、平、和、を、得、る、
修、む、と、し、送、り、の、勞、働、の、多、量、者、を、許、す、と、政府、が、補、給、し、て、お、る、か、ら、こ
の、入、海、し、る、後、等、り、速、か、ら、海、軍、を、得、る、の、後、等、り、要、求、を、合、つ、て、
民、地、に、お、く、る、皆、を、回、る、て、く、や、ら、と、懶、惰、の、心、を、お、す、と、
海、軍、の、勢力、を、得、る、に、結果、が、ある、と、英、國、は、也、が、敗、れ、た、ら、と、
成、る、と、ある、の、船、運、の、思、ひ、が、エ、ル、ザ、ベ、ル、條、約、と、同、し、條、件、を、英、國、に、
さ、し、て、ある、の、四、千、六、百、萬、の、人、口、内、に、は、教、育、不、用、の、人、民、と、さ、す、
ある、陸、軍、地、の、供給、も、興、く、海、軍、の、投、資、を、如、く、海、軍、も、
お、さ、す、と、ある、の、か、ら、英國、民、の、國、内、窮、乏、が、多、く、な、る、と、

越後岩船郡高瀬温泉
 關鐵之助遺跡
 越後岩船郡高瀬温泉
 關鐵之助遺跡
 越後岩船郡高瀬温泉
 關鐵之助遺跡

千里潛行許少才 鐵志有好泣艱辛
 蕭條荒塚靈泉碧 曾使樞門喋血人

櫻田烈士關鐵之助拳事而後潛行諸國就縛於越後檻送
 江戸處斬其妾伊能頗有氣節亦被逮幕吏拷掠慘毒備至
 終不屈死于獄中昭和丙子晚春予遊越後偶過高瀬温泉
 高瀬本稱雲母實其潛匿之地也乃賦一絕吊之

雲莊 入澤達吉
 東都 野村保泉刻

越後岩船郡高瀬温泉
 關鐵之助遺跡

仰不愧天 不愧世 丹心

一 清心 作 滿山 風

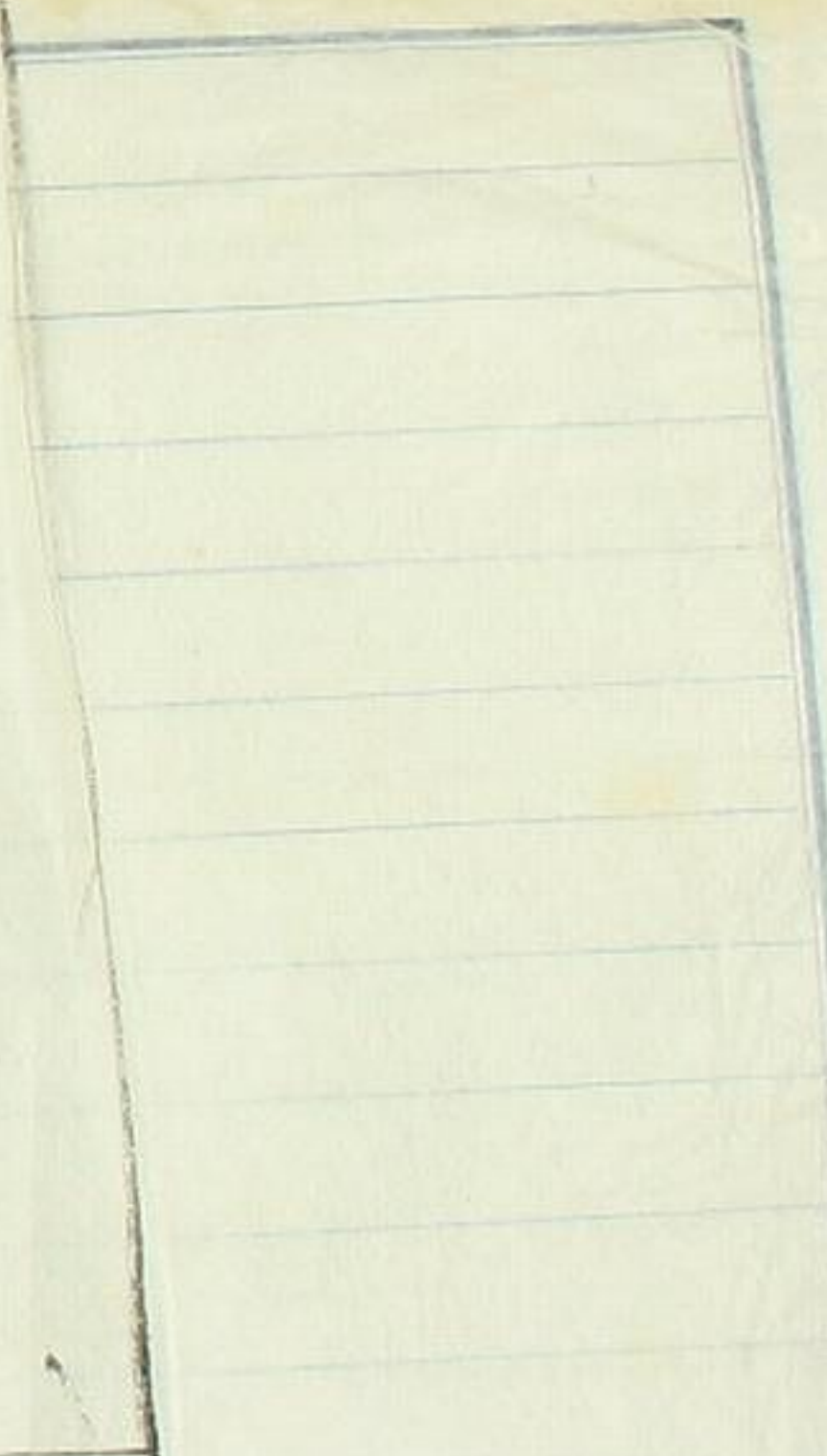
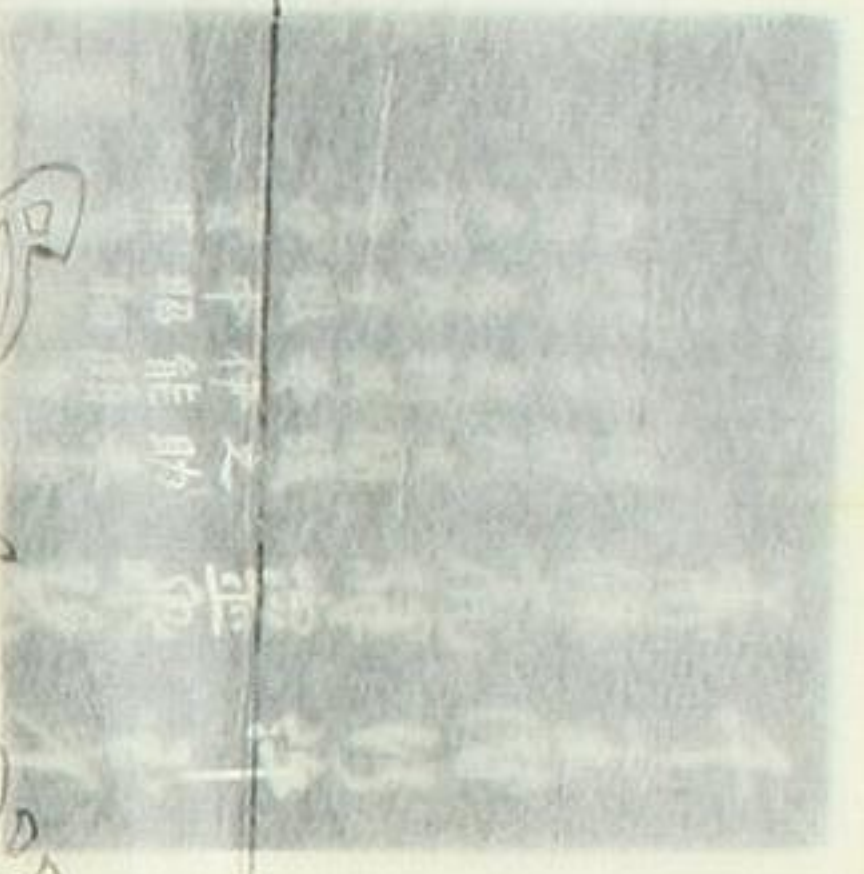
雪 吟 曉 吟 正是 堤

空 就 以 裁 射

北 魏 上 閩 陽 澤 就

博 博 得 御 國 途

中 日 品



10
15
20
25
30
35
40
45

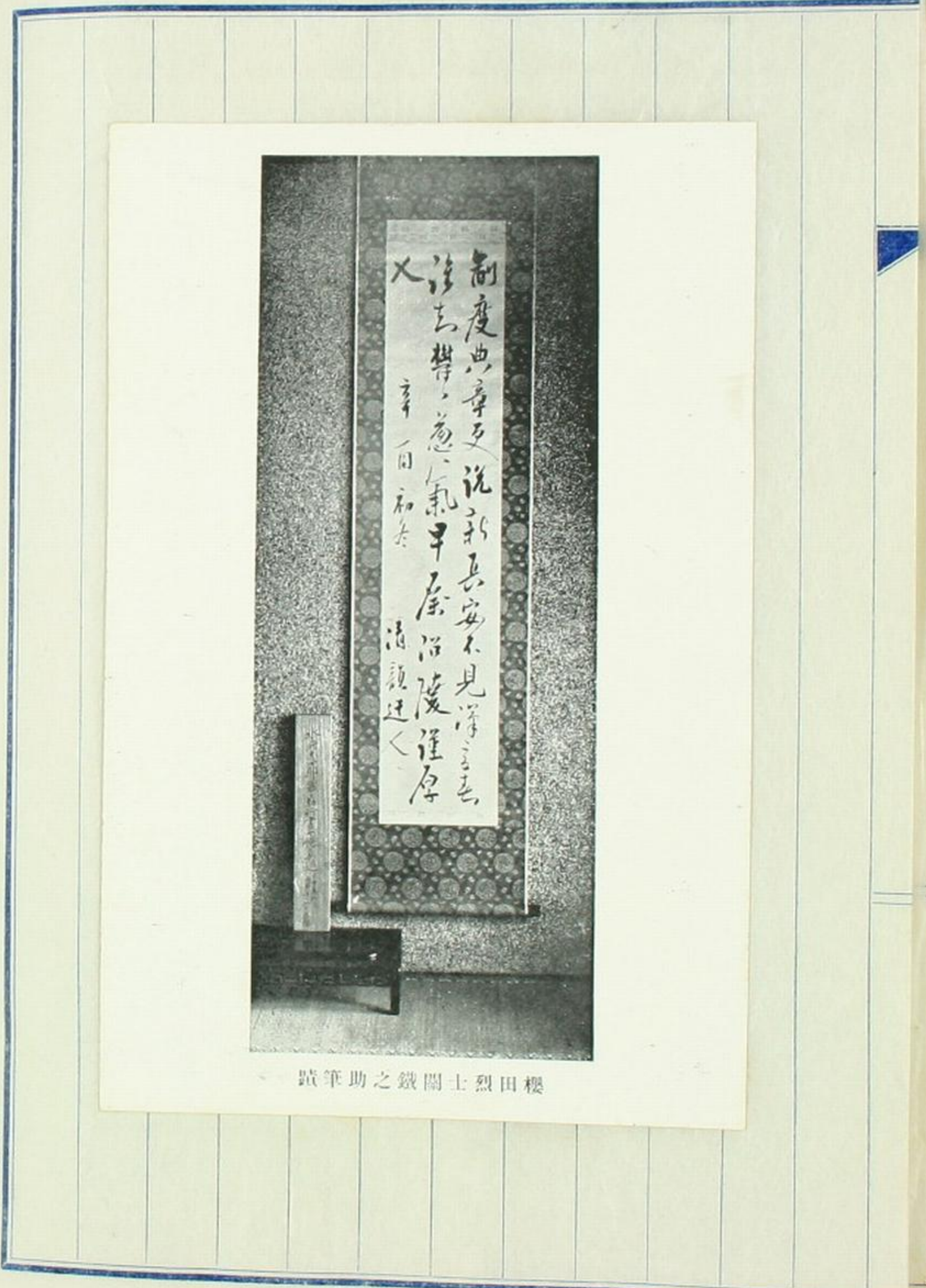
献捷期何日
名山自古
德弥花
轻可法
新升如
冷初
花送班
其禄
志菜
少有
储非
资当
在
裕慢
谗
古人
书

乃之与柏

香城先生以此止

庚午夏月

○越後の雲田浪あは岩城郡の御飯郷、全か今時より確かに三
 村にあり。自分の先は為延元末頃、其のあはけの想像は難く
 なる。この處は、浪送の宮とて最も名としてあり、萬延元年三月の
 戸浪士が井伊大志を擁護するに、其の隊の内通して此地に潜入しよ
 一人あは、是の洞窟に幽ひあり。此の事、此地の名蹟とて、近頃入
 津崎士よりつて傳へたり。漸やく人の知る所となり。近頃、此の
 芳名をくると頻々且おちつて、中々傳へる。其の事、其の事、其の事
 余のこの遺本をよむと、則ちこゝに、然りて存すと云ふ。八
 月十日記



浪筆助之鐵關士烈田櫻

櫻田烈

紀曉嵐銘硯

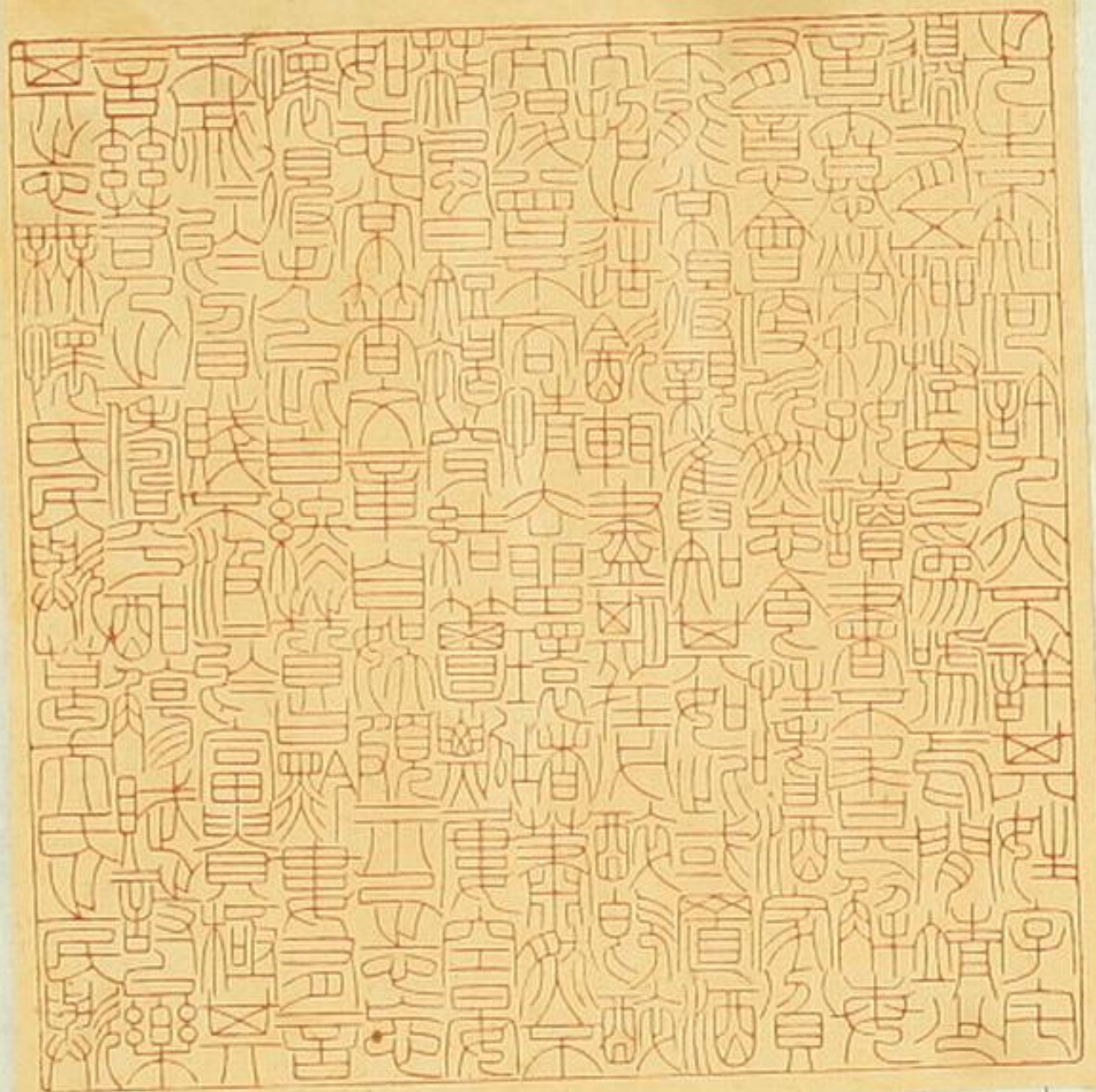


解説

この硯は閑微草堂硯譜中の尤物である。高さ六寸強、潤さ四寸四分強、厚さ八分五厘、明坑の水岩である。墨堂の蕉葉白鮮麗でや、紅氣を帯び、全體に微塵青花と青花結を藏し、兩側に翡翠紋がある。硯背には綠荳眼散在するのみならず、蕉葉白中に魚腦凍がある。石質極めて至純、發墨も亦佳である。殊に琢鑿は精妙を極め、池中に桐樹と鳳を配し、鳳眼には綠荳眼を利用してゐる。硯背には巧緻なる蜻蛉と雲紋を刻

桐生朝陽、鳳鳴高岡、卷阿效詠、周以世昌、助哉君子、仰企召康、四門宏闢、邦家之光、嘉慶甲子正月、曉嵐銘

の自分善か越海
 の私合取樂可庭
 因に成島柳北の碑
 を主とんかつる又
 へんか左り流か初
 りそ、ち
 忽忙に夜記馳車
 定條銷炎去與
 正嘉治後反昔
 多少感、柳か碑
 射禁敵死
 福田天茂心



先生不知何許人亦不詳其姓字宅邊有五柳樹因以爲號焉間靖少言不慕榮利好讀書不求甚解每有意會便欣然忘食姓嗜酒家貧不能常得親舊知其如此或置酒而招之造飲輒盡期在必醉既醉而退曾不吝情去留環堵蕭然不蔽風日短褐穿結簞瓢屢空晏如也常著文章自娛頗示己志忘懷得失以此自終贊曰黔婁有言不戚々於貧賤不汲々於富貴極其言茲若人之儔乎爾鵬賦詩以樂其志無懷

父以世善天茂之氏

民翼賛の組織確立

高度國防國家建設へ

首相 超政黨の運動促進

東樹立に當り内面的に參與せしめる
 運動は絶対に所謂政黨運動ではあり得ない
 の形をとるものでもない
 民が大政黨の誠を致さんとする國家的且恒常的なる組織である
 後に準備會の議題として(一)國民組織の一般構成(二)國民運動の中核體
 現存諸團體との調整、國家機構との連繫の三點を示唆した

大臣聲明

國民の如くであるがその中心理念を國民翼賛の組織の確立に置き、次に次の如き骨子を敷衍して新聞記者に於て
 立の形をとるものでもない
 問題として(一)統帥と國務との調和(二)政治部内の統合及び能率の強化
 民翼賛の國民組織の確立にあり
 文化の各領域に互り縦に組織化され更に各組織を横に統合する全國的の
 東樹立に當り内面的に參與せしめる
 運動は絶対に所謂政黨運動ではあり得ない
 の形をとるものでもない
 民が大政黨の誠を致さんとする國家的且恒常的なる組織である
 後に準備會の議題として(一)國民組織の一般構成(二)國民運動の中核體
 現存諸團體との調整、國家機構との連繫の三點を示唆した

國家的事業であり、全國的なる國民翼賛運動
 に外ならぬのである、而してそれは既に實に意義に於ける
 運動ではなく、實に政治理想と政治意識の高揚を目的とするもの
 である、之がなれば廣く朝野有名無名の人材を登用
 して運動の中核體を組織し、そこに強力なる
 政治力と實踐力を結集せしむることがこの運動に不
 可缺の要件となるのである

かくの如くこの運動は高度の政治性を有するものではあるが、それ
 は斷じて所謂政黨運動では無い、政黨は即ち個別的
 分化的なる部分の利益、立場を代表することをその本質の中に蔽して
 いる、勿論部分なき全體はないのであるが政黨がその中に部分的
 的要素を持つといふことを以て之を離するは必ずしも當ら
 ぬ、殊に經濟活動の基礎が自由主義の原理であつた時代に於ては、
 かくの政黨の存立もその意味があつたのであつて、我が國に於ても
 政黨が國民翼賛の努力に對し民意を傾倒したことは之を認めねばなら
 ぬ、併しながら同時に政黨の過去に於ける行動が動もすれば、我が
 國國民の本能から選別するの少くなかつたことも之を
 否定すべくもない

國民組織の運動は自由主義を前提とする分立的
 的政黨政治を超越せんとする運動であつて、
 その本質はあくまで舉國的、全體的、公的なる
 ものである、それは國民勢力の集結、二分を促進することを
 目的とするものであり、従つて、その活動は國民の全生活領域
 に及ぶものである、國民組織運動はその故に、假りに民間運動とし
 て始められた場合に於ても、既に本質は、從來の概念に於ける政
 黨運動ではない、むしろ政黨も政派も經濟團體も文

日支間の國六

圓滿妥結

三十日 阿部・汪

新體制準備會は軍、官、民各方面の要者に對して、かくの如
 き國民組織の一般構成、國民運動の中核體
 の組織、それと現存諸團體との調整、國家機
 構との連繫等につき協議協力を乞はんとするも
 のである

得るやうにせねばならぬのである、思ふに從來の如く國民の大多數
 が三年か四年に一度の投票により選舉に参加するのみを以て、政
 黨に對する「選挙」の概念とするが如き状態であつては、國民全部が
 國家の運命に熱心なる関心をもち得なかつたのも、當然といふよ
 きであらう

國民組織は國民が日常生活に於て國家に奉獻する組織なるが故に、
 それは經濟及文化の各領域に互つて樹立され
 ねばならぬ、即ち經濟に於ても文化に於ても、あらゆる部門
 がそれと組織化され、更に各種の組織を横に結んで統合する
 とする全國的なる組織が作られねばならぬ、今日經濟文化兩方面
 に於て、政黨を樹立する當局者が國民の實際活動について眞の理解
 を有せず、又國民の側にも國家の政策決定に無関心であり、か
 くして取捨のものと取捨されるものとが對立的關係に置かるゝ如き
 向あるは、正しく國民翼賛の實を擧ぐべき組織なき處より生まるゝ
 弊害である、かく考ふる時、いふ所の國民組織の眼目が公的である
 かは自ら明白である、即ちそれは國民をして國家の經濟
 及文化政策の樹立に内面より參與せしむるも
 のであり、同時にその樹立された政策をあら
 ゆる國民生活の末梢に至るまで行互らせる
 ものである、かくる組織の下に於て初めて、下意上達、
 上意下達、國民の總力が政治の上に集結され
 るのである

獨、一年の戦闘經過發表

撃墜七千機・撃沈五百萬トン

【ベルリン特電一日發】九月二日第二次歐洲大戰の開始二週年を迎へて獨逸紙は諒解や感嘆や戦果の統計等を擧げて過ぎし一年の戦々たる獨逸防軍の戦跡を回想してゐる、注目されるのは獨逸軍の戦勝戦成功の原因を戦開始前の十二分の準備にあつたことを指摘してゐること、何れの戦勝に於てもその戦勝期間に數倍する準備期間が過されて居り、この十分に計畫された用意と優秀な指揮と並しい精確

がかゝる千五百萬の戦果を齎したものであるとなしてゐる、獨逸軍の過去二年間の戦勝戰報報告の中から目星い戦果を拵ふと次の如くである。

◇戦死者數 過去一年間の獨逸軍の戦死者數二萬九千人、行方不明二萬四千人、俘虜者十四萬三千人、合計二十萬六千人

▼之を一九一四年の即大戦最初の四ヶ月間の戦死者合計五十八萬二千人及び一九一八年の僅か二十日間の北フランス會戰の獨

逸死者九十七萬四千人（中戦死二十二萬五千人）に較べると實に十分の一程度の僅少な損失であることが解る

◇空軍の活躍 獨逸空軍は過去二年間に二百二十日間に輸出したその間三千五百回の空襲を行つた、その間合計五百萬噸その重量計七萬五千トンの爆弾を敵地に投下した

▼敵の艦船を公海を以て撃沈すること五百隻三百萬トン以上に達し爆撃により損失を與へた敵の艦船は七百隻、五百萬トン以上

上でのぼる

▼獨逸の損失は千五百機なるに對し敵機の損失は空中戦によるもの三千百機、高射砲及び地上爆撃によるもの三千八百五十機合計六千九百五十機即ち獨逸機一に對し敵機七の割合で獨逸軍を撃破した

◇海上封鎖の效果 獨逸海軍及び空軍が開戦以來去る七月末迄に撃沈した敵の軍艦及び商船の總トン數は機雷に依るもの及び捕虜を與へたものを除外しても四百九十八萬六千八百六十トンに達し然もこの海洋戦は獨逸の新造潜水艦が開始と出動してゐないから將來更に激化するであらうと見られてゐる

